

四國志

215
2057
32

準貴

18  
KEIOGIKU UNIVERSITY



西園寺

四國落

徳川

幸田

徳川

ころりやとふ判友ぶいり退おまきくして掃  
 川あよ下向るまき退退しておまきせきうハ  
 みく乃せんしとわうあうう入義禮まやこり  
 わらん事いりよくのちんとぞんまらこひ  
 乃お立候うまう人よ命参りむ録との人こ二  
 百余録まらり部の内候おさせ給ふ 十二人  
 乃まこころこを以候なりとそまこりせ給ふ  
 まけのひより一内落していり事そ正そお  
 もや園東よりのふけうのまめていへそたうり

四國落



とう乃あまのとり地ふさうりもさこれ園とす人  
 の心をもましを義強ううこまん事一を治定也  
 さあらんごきあさうしく清おろそく一有り  
 こゝこもる兒を強よまてなまかやうとん義強の  
 娘乃ゆゑ夫のますううア〜〜〜とまり  
 婦人よ十二人の水のわいびよ〜と〜〜  
 ぬ〜た〜人〜うたの山乃おくま〜三津れ〜を  
 ありた〜のふあ〜建をうらるま〜と〜〜のり  
 ま〜の物や〜と〜さ〜記あ〜と〜せ〜のひま〜ら



四四



ざんじやうなるまをてあまをふりまひていふ  
 ことばはくみりてはくしひめをいふことば  
 をくあらはれたのまをいふことば  
 まつまわあひよくのまをいふことば  
 とそ二百余騎よすいの人こま けあ一張あらよお  
 こめてあまをいふことば  
 けあのかすんていふことば  
 なるまの百子初万奉一を皆養のあま  
 くむさうとあまをいふことば  
 けあ今乃ぎけのまをいふことば

来る山崎やまざきたうとていふことば  
 せねとあころめとろりらんりじ一あ  
 びのりやあくたあまをいふことば  
 このをいふことば  
 又うらおまげあ一のまをいふことば  
 おき乃あまをいふことば  
 ひ一あま一とていふことば  
 まつまわあひよくのまをいふことば  
 こをいふことば



ともや大物のうらよほく 毎冬に平巻くやうな  
 ちまきより西へ乃らひのしらすのじあようん  
 せきよて流あり乃らり流ゆめくうらひは  
 まあまきより流ありよめされは玉おらり  
 伴る乃河龍を流くものまあまきふあをらくは  
 産あり世乃ありさぬ流は流せきまう人玉  
 九列一あんふ思ひはさうさう十万余騎を以  
 ちその大勝戦その一に於てせめくのあり  
 さん志む乃ともかゝを流くらのまじふあり  
 かりるとう代よあまき流りてはるき義理

まきよめまきよてさうを流と用させよぬらと  
 ちてむ縁との大龍八そう十二人の水た方た  
 流流乃人こ二百余騎おのひくあゝ流く  
 よらりのりをひてのうせ流ま門かろふ目え  
 のとうなりおせよとてとえ流れとひてま  
 りる流ゆくと小順風ちんぷうはよ切りきり二時計た  
 流るる小なとふまきまう和田のみさ記と  
 あり流わそくえまきまき 弓を流んまら  
 流し流うりそ めくいの石かの人たた ああ  
 乃梅の秋も あらね秋え う流のた川よえ



うねも 漕ぐれゆくあまをみゆあり  
 りそあとうらるるあま上ころこいこきま  
 びろ乃おきよまきつこよきり まひのおりせ  
 きり屋うきいふやあま<sup>いも</sup>お<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>こ北津  
 とまりあて中こお祿とよすらるるはあせん  
 乃事一えありねる一順風うくはうすくふ  
 空國へまこせとおりせきりあつとやせうり  
 とりあ<sup>い</sup>海一<sup>い</sup>津<sup>い</sup>船<sup>い</sup>波<sup>い</sup>は<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>と<sup>い</sup>う<sup>い</sup>て<sup>い</sup>な<sup>い</sup>一<sup>い</sup>後<sup>い</sup>と





かりきりとりよりなりさぬさの岸ぬれ人  
 くらむも雲一ひりまきく熱風うきおくりきれ  
 ありやきりり屋うきうる海熱風のおこらんや  
 らんくもの氣<sup>い</sup>あらんてんーうこれおりて  
 さうさうーあうなませうのとあうひりくあ  
 びんと甲さひひさきーめされてそまうー色  
 さおお玄卒一岸ぬへひりひーとき後<sup>あつ</sup>色  
 よりも少絲よのりなーいーうらうさくも  
 よちるともちりりやねきうあひあり船とよく  
 紫<sup>あ</sup>男さしせよ船あひのよあはあゆのりひりく海

うかよらそらきてあひ人いもようせわー  
 たしひ風うまげーくたとちうとらひて屋の  
 てんよた紙あまう務うまげあくるまあらか  
 けてさーちせよそれあまうせうふいあは  
 らはがさーらとらりてやうくかよおとら  
 とほくおどりうらてれよりくとりまらつと  
 うそきーま城まで回城うーて屋のくかよ  
 けんとりたとそおかせげりあんとたPを連  
 とそ 終道乃かせようそ思ふと海あはあ  
 初とあまびあくあうーハはのみじこ屋よ







中うおておこつらへるさしほるるま  
 るんまのやまへうあそ連風ハ新王北判  
 陸くありきとて時の中一きをとり給ふ小  
 たうとてあめめては流んせうまは人 けはは  
 たうとてあめめんとそ十二人のまこた方北  
 かとて乃小袖くまはる井の ちあかのんらま  
 判者乃 ころ給儀りの けとてせ 海庭よ  
 あめめへ海心まひそとよりそあの人こてう  
 そこち乃うとあやうめくは流給北一れ巻と  
 かんかんくもやとてそあめめとては流給北一れ巻と  
 かんかんくもやとてそあめめとては流給北一れ巻と  
 あめめとては流給北一れ巻と  
 けりもゆり 又ハ流乃う人うりもつらゆさ  
 けりもゆりもものうせはハ川とんとてこを  
 悪風うとあつりまは連并あそとて只事  
 あつりとあひひあまそこへはつと入こまん  
 まつりけうらひけあひのありこよはつらうら  
 あり





たいとんあひくよまうりうう今あきとよ  
 すく見りてううはるのまはいつあう者と思ふ  
 らんをのくうひう大長り来孫田る人此  
 るのううんそりうる嬌子せあもしくらハお  
 雲乃團枕本乃さそそ川としくらハ三葉京極  
 うくもんまらあ天香山あく海ううゆくの貴  
 僧と生連それ風をううまうのうう一給へあ  
 りきとてと死乃少一さ残る一給ふよあん  
 そき給くとりふまうおりううよ救珠をとり  
 ううううくとをううんて東方あけうう











忍びし世路ふ十二人の母のひ人れありり  
 路はおもほりこそ少縁あはれとるりきりり  
 せし世路くやとらしあしうせりやちのあひ  
 あんらうくさうあんだむとせらてくせせ  
 ろとてせまもこととらととく思ひあふ  
 るよりのいとあほまてさうあそ　さまたは  
 おまよあまこつらうあり　ふりたやあ  
 とせりく　村とりふい里れ名　そのう人  
 ありさああそ　めあり火と云度と　なふと  
 りりいふ　ふせられきり　いふあひうら  
 けのくふ乃あ一な乃ううの事一あうむらふ  
 我うととヤきり　義理さう一かえれくとて  
 一とそんすらうふせうとのびうら  
 津乃あ一な乃浦うさびはねせうとのさび  
 うら乃人うりや徳<sup>徳</sup>者のあこのさのありとて  
 けすくあくれうせうせ路ふ　ねはうこふ  
 としああ一たつとらうあうあんの義理  
 あとて　を一人路人る　たつとさうよと  
 しがてあうらひ一とそあこらう一  
 路ひたり　さうあひこあれあのとあ一なれ



うへをいよすらぬ浦の女はわい屋の三郎  
 三郎あけあま子よあふてとふた船子あゝ人  
 てやうんいもいりまうとものく船舎才たま  
 乃判友義隆西玉下向浦一ますう悪風ふあう  
 連このううよようせ給ひていとやうあけ  
 雪とさきけくそびきまゝい鑑舎友の法伴うら  
 りせ給子人よいとけ君をうらや関東へあう  
 せらんこうけあうよあうらん人こなると  
 りよまうお浦うらとふあむあうへとそ  
 飛とと思ひー乃人二三百人まらとら

およろひの浦屋少孫と二き三きおをりおまひ  
 てさき城とつとあくらりこりーや水産少子  
 あはりの連を船あくらあゝせんこをあゝん  
 見くさうせ給ふその中一お毎々船あゝを  
 あうあ福くようあんきひーけまはとの  
 冬こくそくさうさめ三十六指くら大甲思  
 乃そわおあてお人まりのまんさうあきり船  
 庫うこみほつうらあう大おんあけくさう  
 り





といふまゝあつてさうすく見おあつはるの  
 といふあつそのあつもんぬつそやあ建あ道倉  
 ぬ乃水舎才<sup>よて</sup>た吏の判取より一はひれ西園下向  
 海一もたう急風入りしり建びうへもせ  
 へまひてゆよ流ぬ建州へそまぐた水まひこ  
 とけ中さたして 何そやいまのらうせさへ  
 手らまゝのりく強見せんとして さうよりひさ  
 けあまんくみ射たりたりおりておすむ  
 結はるのと十七八騎もさうさういひ建はる  
 矢あろ強ひきありそくさ川あげあめよりと



うらやむと河原筋よ今も夫程やつさぬん  
 久しかりしせんことと河原少縁まらう切  
 てうらなむんきい乞とてゆゑ矢どかゝる  
 なげよそなまゝいひんぬしつらふりお入  
 とんておりまげととあひをふたま  
 らう成らむしくりたふりさうらひい  
 三河志げ并きよりおらぬいひんぬしつらふりお入













